

じと見えたりぬりこは塗子也障子紙は天工開物に櫛紗紙と見ゆ、  
〔柳亭記上〕疊 障子

昔の障子は今いふからかみなり、大内のあら海の御障子となふるものなど、晝からかみなるは、たれくも知る事なり、その障子の骨に、たゞ一重紙を張るは、明をとらんが爲なれば、明り障子といひしが、今の障子なり、俗に障子の板を腰といふ、その板のなきを、明障子といふとはたがへり、からかみといふは、唐紙に張たる障子といふ事なるべけれど、ふすまといふ意更に考へえず、十訓抄二卷初丁ウラ、御使を椽にすへ、あかり障子をへだて、こゝに謁す、古事談三の卷、美作守顯能の許に云々の條に、雑色相具シテ遣タリケレバ、明障子ノ内ニ讀經シテアリ云々、明障子といひし事、是より古くありしが、意をとめず見すごして、何の書なりしか忘れたり、見出して書加ふべし、

〔江談抄二〕雜事先考大江以明障子立四面、其中曝涼家文書、

〔十訓抄二〕江帥は又めでたき相人なりけり、清隆卿因幡守の時、院の御使として來れり、帥持佛堂に入て念誦の間なりければ、御使を縁にすへて、あかり障子を隔て此に謁す、○又見古事談

〔雅亮裝束抄〕その二かゝるのみなみに、○中おなじきまのもやに、○中かゝるををきてのち、ぬりこのあかりそうじをまごとにおほふ、

〔三中口傳三〕中ノ間明障子用紙事

中間明障子爲紙事常事也、

〔明月記〕天福二年八月廿二日戊子、今日藻壁門院周忌御法事、○中後日參拜、見端立、明障子御臺上、置石倉立、犬禦云々、

〔徒然草下〕相摸守時頼○北の母は、松下禪尼とぞ申ける、守をいれ申さる、事有けるに、す、けた